科学者インタビュー

インタビュアー：田村　均

松沢 哲郎 氏

霊長類学の新風，「アイ」プロジェクトの認知科学者

1950年，愛媛県生まれ。京都大学文学部哲学科心理学専攻卒業。理学博士。専門は霊長類学・実験心理学・認知科学。京都大学霊長類研究所教授。チンパンジー「アイ」の行動の解析を通じて，チンパンジーという生き物のなかにどういう認識が成立しているのかを研究する「アイ・プロジェクト」にたずさわる。その研究の概要は，松本元氏との対談『脳型コンピュータとチンパンジー学』（ジャストシステム，1997）の中で生き生きと語られている。著書には他に『チンパンジーから見た世界』（東京大学出版会，1991），『チンパンジー・マインド』（岩波書店，1991），『チンパンジーはちんぱんじん』（岩波書店，1995）などがある。

◆松沢先生におうかがいしたいのですが。質問項目は5つほど簡単なものが用意されているんです。第一番目の質問は，「先生の考えていらっしゃるよい研究とはどのような研究ですか」，です。漠然としてますけど。

よい研究ですか。僕はよく，「研究者っていう特別な仕事があるわけではなくって，お豆腐屋さんや八百屋さんとおんなじだよ」って学生に言ってるんですけどね。ま，「これはうまい」っていう豆腐がありますよね。それで「これはうまい」っていう豆腐をつくる豆腐屋がよい豆腐屋だと。研究の場合も，最終的なアウトプットとしての論文等の著作を通じて，「これはうまい」，「これはおもしろい」と人をしてうならせるようなものがよい研究だし，よい研究者なんだと思います。よいか悪いかっていう判断規準は作り手の側にあるんじゃない。豆腐はそうですよね。豆腐屋が「これがおいしい」って決めるわけじゃない。研究でも，受け手の側の人が「これはおもしろい」と言ってくれる，そういうものだと思いますね。ポピュラリティはなくっても，その狭い範囲について非常に深く知っているごく少数の人たちがうーんとなるようなものを作り出すというのも，もちろん，よい仕事だと思います。いずれにしろ，「これはすばらしい」と受け手の側が言ってくれる，そういった仕事がよい仕事であり，研究者の場合はよい研究なんだと思います。

◆次の質問は「よい研究をするためには何をすればよいでしょうか」，「よい研究をするための条件などを述べていただけませんか」っていう質問なんです。今のお話だと，

受け手っていう基準をとることが大事だよってことでした。じゃ，やってる本人はどういう風にしてよい研究を体験し続けることができるんだろうか，という疑問になるわけですが。

よい研究っていうのは研究者が決めるんじゃなくて受け手が決めるんだっていうのはその通りだとして，やっぱり「オリジナル」とか「ユニーク」っていうことが研究においてはすごく大切だと思うんですよ。きっとお豆腐でいえば，新鮮さとか歯ごたえとか，あの，香りとか，いろんな評価の次元があると思うんですが，その新鮮さであり歯ごたえであり香りであるものが研究においては何かっていうと，「オリジナリティ」独創性だと思うんですね。

「お，初めて聞いたぞ！」「やや，知らなかった！」，というような感動を人に与えるっていうことがよい研究だと思うんですね。オリジナルなもの，ユニークなものを作る。じゃあどうしたらオリジナルなユニークなものが作れるかというと，うーん，僕は学生たちに，「努力する，努力し続けるっていうことでかなりの問題は解決する」とよく言うんです。自分もそういう風に努力して解決していくことを心がけますしね。実際それがほんとうにどれほど有効か否かは別にして，そういう「持続する意志をもって努力する」という態度が自分は好きなんですね。でも別の見方を言えば，やっぱり，かなり持って生まれた，あるいはそれまでに培われた「感性」みたいなものが研究においてはすごく大切だとも痛感しますね。よい耳をもって生まれないとよい音楽家にはなれないというのと同じような意味で，その「研究のよさというものを感知する感性」っていうのが研究者にとってはすごく大切で，それはある種持って生まれたもののようにも思えます。新しい発見・発明をしたら誰でも感動できるかっていうと，必ずしもそうじゃない。感動できない人がやっぱりいますからね。だからその「新たに知るということに感動できるという感性」が一つと，それからやはり「日々の努力」というか鍛練というか，そういったものがよい研究を生み出す基盤にあると思います。

◆なるほど。予定の項目を順次うかがいますが，次は，「研究のアイデアというのはどのようにして思いつくのですか」。これも非常に漠然とした質問なんですけど。

その問いに触発されてやっぱり二番目の問いで，もうひとつ答えなきゃいけない問題があると思いました。僕は，よい研究をするために一番大切なのは，作る側として必要なのが感性であり，そういう感性を磨くというトレーニングであり，日々の鍛練だと言ったんですけど，それはいわば研究のよさを吸収する側の姿勢についてですよね。今度は，そのオリジナルな研究，ユニークなものをクリエイトするときに何が一番大切かというと，動機ですね。日々の鍛練とかいう以前に，そもそも「日々の鍛練をなぜしなきゃいけないか」ってことがあると思う。「がんばんなきゃいけな

いよ」ってはたから先生や親がただ口で言ったって，人はなかなかがんばらないわけです。だけど，たったひとつ，人は死にもの狂いで努力し死にもの狂いで勉強する方法があると思うんですよ。それは，ものすごく高い目標を自分で掲げて，「何とかその高い目標に向かって努力をしたい」と本人自身が強く願うことです。まあ，自分にとっては，山登りだと非常にわかりやすいんですけどね。8,000メートルの未踏峰があるとしましょう。この日本に生まれて普通に暮らしてる時に「ヒマラヤの未踏峰8,000メートルの頂上に自分が立ちたい」っていうのは，やはりとんでもなく高い目標ですよね。現時点からは随分かけ離れた，夢のようなって言うのかな。でもそういう目標を持って精進するっていうことが，とんでもなく遠くまで行くためには，あるいはそういう努力を継続するためには，とっても大切だと思うんですね。逆に言えば，そういう高い目標とか夢なしに，鍛練とか努力とかいってもそれは続かないと僕は思うわけです。

そこで今あげられた，「どういう風にしたらそのオリジナルでユニークな研究のアイデアを得られるんですか」と言われると，結局，すでに高い目標が掲げられているわけだから，なんて言うのかな，総力戦だと思うんですよ。持ってる自分のすべての知識と，すべての体力と，すべての時間と，すべてのエネルギーをそこに傾注しないとそんな高い目標には到達しない。すべてのエネルギーを傾注してその目標に焦点を当てれば，自ずから，ただの一般論としてじゃなくて，こういう場合は具体的にどうしたらいいか，どうすべきかっていうくふうや解決が生まれてくると思うんです。別の言い方をすると，目標に向かって何かやらなきゃいけない時に，あれもこれもしなくちゃいけない，こういう分野にも目配りしなければいけないと，自分の時間を割り振って努力する人が多いと思うんだけど，それはまちがっていると思う。「あれをしない」「これもしない」「これも必要なんだけどやめておく」と。誰でもこの一生という時間しか持っていないわけですよね。そのなかで「持っている自分の時間と体力，気力，知力のすべてをその一点へ注ぎ込む」。それこそが個々のその人にとっての「よいアイデアを生み出す方法」だと思うんですね。

●お話をうかがつてると，要するに「切り捨てる勇気を持たないといけない」と。

そうですね。一般には，「何事かを成し遂げるためにはいろいろやらなきゃいけない」っていう誤解があると思うんですよ。でも実際に何がむずかしいかって言うと，そういうふうにいろいろしない，ということの方がむずかしいんですよね。今自分はこれが本当に知りたい，本当にこれがおもしろくてしょうがない，というものに全力を投じようと思ったら，朝4時に起きて座禅を組む禅僧のように，ただひとつの問いを深く深く考える。そういう形の学問への打ち込み方っていうのがあるべきだし，それ以外になんかその，よいアイデアのひらめき方はないと思う。一般に信じられてるのは，逆に，いろいろ広く見渡してね，あの人からこんなことを学び，あんなことも感じ，いろいろアイデアを得て，そういうなかでこう思索を巡らすとよいアイデアが浮かぶように言われるんだけど，本当は「よいアイデアっていうのは自分の内側からしか生まれてこない」と思うんですね。

●なるほど。それじゃ四番目の質問なんですけれど，「研究生活上大きな失敗や挫折はありましたか」「あつたとすればどうやって立ち直りましたか」です。

うーん，なかなかよい質問ですね。いやあ，わが身を振り返れば，打ち続く失敗じゃないですか。もう。

●たとえば。

いやあ，なんかどれ一つとして満足がいった，これは成功した，やったっていう，そういう感じはないですね。なんかやっぱり，常に満たされないものという方に目がいってしまって。もちろん満足感というのはとっても大切で，満足感がないと研究は続かないと思う。だけど満足感っていうのは，「食べてしまえばそれまで」っていうか，はっきり言って忘れちゃいますよ，それは。意識の表層にあがってるのは「ああすればよかった」「こうすればよかった」「ああすべきだった」と。基本的にはその失敗を常にくり返しくり返し反芻して身近に持ってる。少なくとも自分はそういうタイプの人間ですね。ただそれは，「後悔」っていうのとはちょっと違うんですよね。「後悔してる」っていうとなんか「ギブアップ」の感じがあって，「あの時はああすればよかったのにできなかった」と，その事をいつまでも悔やむ。もちろん自分にもそういう面がなくはないんだけど，どちらかというとむしろ「反省」に近くて，同じようなチャンスっていうのはまだまだ先にもずうっとあって，「次の時にはきっともうちょっとうまくやりたい」と思ってるわけです。成功例ですべてを仕切っていこうというよりは，「うまくいかなかったことをいつか埋め合わせたい」というか，「この教訓をいつか生かす時があったらいいな」と思いながらやってるんだと思いますけどね。もちろん人ぞれぞれに違うわけだから，画一的にこれがいいという方法はないはずなんですよ。今の場合も，たまたま僕は失敗というものを意識の表層で引きずるタイプの人間で，逆に言えば，「心底後悔する」，あるいは「心底打ちのめされる」というような感受性がある意味では欠けているのかもしれないですね。一般論として言えば，やっぱり，どういうことでも51勝49敗でいいんだと思うんですよ。その100戦100勝っていうこと自体がね，あり得ないんだから。

●なるほどね。これが用意した最後の質問なんですけど，大学院生，若手の研究者からですね，「第一線の研究者になりたいのですが若い時に何をすればよいのでしょうか」という風にたずねられたら，どんなアドバイスをしますか。

まず，そういう問いがまあ，自分の身近な院生あるいは学生から発せられたとしま

すよね。そうしたら僕はまず，「第一線の研究者になる」っていうこと自体をその子に問い返しますね。それは一体なんぼのものなのか。人生の目標にすべきものなのかっていうこと自体が問われるべきことだと思います。やっぱり，僕はその問いを発した子自体が，どういう背景を持っていて，どういう力量を持っていて，どういう性格の子で，何が嬉しくて何が悲しくて，何を自分の人生に望んでいるのか，そのことの方をまず深く聞きたい。そういった一切のプロセスなしに，「第一線の研究者になるためにはこういうことをしたらいいよ」，というような乱暴なことは言わないし，言えません。だって「人それぞれ」だと思うから。一貫して今まで言ってることは，「人それぞれ」っていうことですよね。だから問いを発した子に向かって，「何でそんなに第一線の研究者になりたいのか」，やっぱりそこをよく聞いてみたいと思いますね。で，まあ，かりに，研究者になりたいという気持ちを強く持っている学生がその問いを発したとして，そしてその子に研究者としてやっていけるだろうなあと思うような資質があると前提して，実際まあ研究者になれると，そうしましょう。さらには，その子がよきこころざしを持って努力もすると仮定しましょう。そうだとしたら，やっぱり何よりも最初に言いたいのは，「できるだけ高い目標を掲げる」ということですね。学生で，20歳ぐらいだとしたらね，まだこれから40年も研究をしなきゃいけないわけでしょ。だからよほど高い目標を掲げないと続かない。こまっしゃくれた20歳の学生が，たとえば，「清朝の何とかがどうしたこうした」とか，「19世紀インドのベンガルの綿工業について知りたい」とか，「ニホンザルの糞分析をして食性をうんたらかんたら」とか言ったらね，それはやめとけと言いますよ。そんな形でこう，小さな場所に入ってしまった者が40年，ま，続くかもしれないけど，そういうのがおいしい豆腐を作るなんていうことは金輪際あり得ないと思うから。もっとゆとりを持った，ゆとりを感じさせる，夢を感じさせるような目標をその子が高く掲げる。教師の側から言えば，ぜひそういうものを高く掲げさせたいですね。「今このジャーナルにこんなおもしろい論文があって，ぜひこの論文の理論を検証してみたい」とかその子が言ったとしたら，それは，そもそもそういう子であったら全然見込みがないし，好きだったらやってみればいいんじゃないのぐらいは言うかもしれないけれど，とても無理だと思いますね。こっちが納得できるような高い目標を持つこと，ぜひそれをその子に願いたいですね。その時に，ただ漠然と，「研究して有名になりたい」とか，「チンパンジーの研究をしたい」とか言われても，そういうのは目標じゃないですよね。それは単に言葉であって，そうなってでは何をしたいのか。目標には必ず展望（パースペクティブ）っていうものがあるはずなんですよ。単に「何々であればいいなあ」というのは目標とは言えない。目標という意味での「山の頂上に立ちたい」ということは，自分が生涯かけてその

8,000メートルの未踏峰に立てるかということだから。で，だからどうするのっていうことになる。日々どういう鍛錬をしていけばそこに行き着けるかという展望のことだから。またそのステップを一つひとつ論理的に深く考えられる子でないといけないですよね。そのパースペクティブをぜひ持ってほしい。それが何より一番大切な，第一線の研究者になる必要条件ってことだと思います。逆にいうと，その後に来るものっていうのは，パースペクティブがないと悲惨になっちゃう。努力するとか日々鍛練するとかを，パースペクティブなしでやると，かなり悲惨な結果になると思いますね。本人が悲惨なだけでなく，はた迷惑だし。

◆なるほど。一応用意した質問項目というのはこれだけなんですけれども，じゃ松沢先生自身は高い目標を立てるということでいえば，若い時にどんな風にして目標を立てられたのですか。

そうですね。はっきり言って大学に入る時点では目標ゼロでしたよ。そこが日本の小中高でおこなわれている学校教育の恐ろしいとこなんだけど。僕は都立高校の出身で，僕らの世代は庄司薫さんの『赤頭巾ちゃん気をつけて』の世代です。僕は両国高校というところにいたんだけれど，何も別に東大に行きたいなんて思ってるわけじゃないんですよ。皆が受ける大学へ行こうかなっていうだけのことです。高校で，数学とか英語とか歴史，いろんな教科，今の子たちとおんなじようにいろんな事を勉強しますよね。まあそれが自分にとってはそれぞれおもしろかった。だから大学に行きたいし，大学でもっと勉強したい。それはさっきの言葉でいえば目標ではなくってただの漠然とした思いです。そこへ，69年（昭和44年）に学生紛争・東大紛争があって，東大入試が中止になった。けっこうすごい驚きでしたね。あれえ，という感じです。でも，もともと漠然としているから，東大がないからといって，まあしかたないかな，しょうがない京大へ行こうかな。そうしてたまたま京都へ，です。そういうふうに何にも考えないで大学に入って，大学でいろいろ学ぼうと思ってたときに，紛争で丸々一年今度は大学そのものが機能しないんです。大学へ入っても大学がない！　で，大学へ行くと，「なんのためにお前大学へきたんだ」と，紛争のさなかの先輩たちから問いつめられるんですよ。非常に根源的な問いを大学という場が発するわけですよね。そういうものに接して，初めて自分の感性が開かれた。物事を非常に深く根源的に問うということは，それまで学校では経験しなかったわけですよね。ちょうど，高橋和己さんがまだ京大の助教授をしてたころです。大学が解体され，『我が解体』っていう本を彼が書かなきゃいけなくなるように，当時の知識人ていうのは事態を自らに引き受けて深く深く考えちゃったわけでしょ。で，自分はまだ知識人の卵の卵なわけだけれど，まさに将来自分たちが答えなければならない問題として，18，19歳の時に，そういった根源的な問いが発せられた，

それが大学という場であった。それは大きかったと思いますね。ところが，じゃあ人間がね，そういう根源的な問いにこう，面と向かって日々暮らしていけるかっていうとそうじゃない。それはそれとして，何かしらふだんの暮らしというものをしていきますよね。僕の場合はたまたま高校の頃から山登りが好きで，東京で奥多摩とか丹沢とか山をちょろちょろっと登ってました。京大の山岳部が有名だなんてことは全然知らなかったんですよ。知らないままに，自分の日常として漠然と山岳部に入った。で，その山岳部というところがね，一回生は神様みたいに大事にされる。上級生は「一回生や下級生が喜ぶ」っていうのがわが喜びになる。そういうかたちでクラブが運営されている。非常にデモクラティックな組織にたまたま入った。大学では何もやることがない。山登りに行ったらすごくおもしろい。実際，山自体すばらしいですしね。そこでまあ，２つのことを学んだと思います。まず，医学部や農学部，理学部・文学部を含めていろんな学部の人が山岳部にはいるわけですよね。世の中にはいろんな人がいていろんなことに興味を持って勉強しているんだ，ということを実感し体験するわけです。高校までいえば，だいたいつきあう範囲は同級生だから似たり寄ったりですよね。だけど大学はそうじゃない。山岳部でいえば，身近な先輩が，ある分野，天文学なら天文学についてものすごく深くよく知ってたりする。自分の今までの学校の知識では全然歯が立たない。どうにもならない，深くておもしろいものが世の中にはあるっていうことを知りました。それが一つ大きなことです。もうひとつはその，山登りっていうのはさっきの，まさに研究を映した鏡みたいなものなんですよ。ヒマラヤではなくても，たとえば厳冬期に北アルプスの3,000メートルの稜線を縦走するっていうのは，とてつもなく現時点から遠いことなわけですよ。高校からぽっと大学へ入ってきた子だったら，まずアイゼンを履いてピッケル使いこなす前の体力作りからね，岩登り，氷雪の技術，たくさんのものを積み重ねていかないと厳冬期に北アルプスの3,000メートルの稜線は縦走できない。だけど，まったく隔絶してるかっていうとそうじゃなくて，ものすごく細かいステップだけど全部先が見えてるんですよね，どうしたらそこに到達できるかが。現にお手本として４年生５年生の人たちがそれをやってるわけだから。彼らの姿を日々目の前に見ながら，大文字山へ駈けて登って降りてというところから自らを訓練していく。そういう遠いけれども具体的な目標に向かって，どうアプローチしたらいいかいつも考えるわけです。また，山登りが研究を映した鏡だというのは，先人の「文献」があるんですよね。どこそこの大学のパーティーはこのルートをこんな風に登ったと『岳人』や『岩と雪』や『山岳』に書いてある。そういう文献を読んで，自分がやりたいということに向かって，どういう細かいステップで努力するとそれが叶うかを考える。それから，山登りのすばらしいところは，結果が自明

なんです。ちゃんと成功して帰ってきたか，それができなかったか。非常にはっきりしてる。で，１年で120日間ほど山へ行って，いつも山のことばっかり話してて，２年生でもまた120日間山へ入って山のことばっかり話してたら，自然と眼はヒマラヤの未踏峰へと向くんですよ。それまたとてつもなく遠い目標なんだけど，だからといって全然できないわけじゃないんですね，今度は『ヒマラヤン・ジャーナル』とか『アルパイン・ジャーナル』とか英語の文献を読めば，そこにはちゃんと記録がある。そういう記録をもとに，どうアプローチしたらいいのか。どうやって航空写真や地図を手に入れたらいいのか。地図も航空写真もすぐにはないならどうしてそれにかわるものを探せばいいのか。過去の文献にさかのぼって情報収集するわけです。もうほとんど研究と紙一重ですよね。同じなんですよ。そういうもので日々自然に訓練されていく。山岳部の先輩には，「棲み分け」や「霊長類学」の今西錦司，「フランス文学」「共同研究」の桑原武夫，「南極越冬」の西堀栄三郎，「照葉樹林文化論」の中尾佐助，「ＫＪ法」の川喜多二郎，「文明の生態史観」の梅棹忠夫，そういう人たちがいる。ほかにも，海洋学，森林生態学，氷河学とかいう目新しい学問を始めてるし，自分たちのすぐ上の先輩たちがそれぞれ自分のオリジナルな学問を作ろうと努力している。研究者っていうものの日常がどうで，どういう人たちで，どういうことをめざしてるのかっていうことを，山登りに結びつけてすごく即物的に具体的に見ることができた。とても参考になりました。他人と同じことはやっちゃいけない，未踏峰だからこそ価値があるんで，そういう規準でいえば二番目三番目に登っても価値がないわけですよ。自分は何にも考えずに，ただ漠然と学問をしたいから，そして「学問の学問は哲学だ」とそれだけの認識で，「哲学をやろう」と思って大学にきた。けれども，自分が考えたその哲学が，大学で実際に経験してみると，本来自分が哲学に期待していたような興味を満たしてくれないことがわかる。大学で哲学の講義を聞くとね，「プラトンがこう言った」とか「デカルトはこう考えた」とかしか言わないから，全然その自分のニーズと合わないわけですよ。誰がどう言ったんじゃなくて，世界がどうなってるのかを私は知りたいわけだから，全然答えになっていない。もっと即物的に，何で私はこう考えるのかということそれ自体をまず手始めに深く考えてみたい。そうすると，一番近かったのが実験心理学なんですよね。今だったら認知科学だと思うんだけど，それをやりたいと思った。それは，山登りをまるまる二年間ぐらい続けたあとの，２年生から３年生になる頃だと思います。一方ではヒマラヤの8,000メートルへ絶対行きたいっていう気持ちとパラレルに，学問としては人間のこころあるいは知性の研究をしたいと思うようになりました。それはしだいしだいに固まってきたと思うんです，その頃にね。

◆なるほどねえ。今お話聞いてておもしろかったのは，これおうかがいしようと思って

たんですけど，徒弟修業中の立場っていうのが苦しいものですよね，先が見えないし何でこれをやらなきゃいけないかもあんまりよくわかんない。それで今，大学院生なんかと接していると，結局その徒弟修業中に自分の目標に向かって飛び込めない，飛び出せない。そこをどう耐えるかっていうのが割とむずかしいんですね，見てると。で，松沢先生はその訓練を山登りの場所でなさったんだなっていう感じがしました。

そうですね。で，その時のね，その訓練のしかたがユニークっていうか，少なくとも僕が過ごした時期の京大の山岳部ってのは，とても変わっていたと思います。たとえば，山登りなら荷物がありますよね，皆で荷物をパックして，さあ出かけようと思ったら，一個だいじな荷物が余っていたとしましょう。正直な気持ち，これ以上背負いたくないと誰だって思いますよね。そしたら，まずまちがいなくリーダーがそれを率先して拾って自分で背負います。上級生が取って，それを自分の荷物にする。そういう雰囲気がすごく色濃くあってね，さっきの言葉でいえば，下級生なのに「徒弟」だと意識したこともないし，感じさせられたこともない。もちろんそれは山に入ればリーダーに従うフォロアーではあるんですよ。でも徒弟ではない。この人たちについて行ったからここまで来れた，こんなすばらしい景色を見ることができた，こんな楽しいことがあった，ということを日々経験するわけでしょ。だからこれは何物にもかえがたい経験だったと思いますね。さらにもう一つ付け加えれば，そうした行為が，ただの精神論とは無縁の世界で成り立っているんです。さっきの言葉でいったら，「徒弟」ともう一つ，「先が見えない」っていうことをおっしゃいましたよね。山岳部のやりとりでは先が見えるんですよ。徒弟でもないし，先が見える。なぜかと言うと，その荷物一つ，その紙一枚をなんで山へ持っていかなきゃいけないかっていうことの説明がいつも求められるからです。たとえば，トイレットペーパーって必要ですよね，どこでも。でもトイレットペーパーを無造作に荷物に入れると上級生に叱られるんですよ。「何でお前，芯を抜かなかった」って。巻き紙の芯に重さがある。何パーセントかは芯の重さなんだからそれを抜けと言われる。さらには，40メートルある紙全部使うはずない，1回何センチ使うなら，全体はたとえば10メートルでいいことになる。じゃ，紙の渦巻きのどこまでほぐせば残り10メートルになるか。これはけっこうな数学の問題です。その「トイレの紙をどうやって10メートルにするか」っていうことにすごい情熱を注ぐし，そこに必ずはっきりと正誤や勝ち負けがある。論理的な世界なんです，すべて。その時には上級生も下級生もない。全然上下関係ないですよ。知ってるか知らないか，解けるか解けないか，説明できるかできないかなんだから。多分そういうスタイルに大きく感化された。「非常にデモクラティックで，非常にロジカルで，非常にラディカルな姿勢」，はたから見ると滑稽なくらい熱心。その行為それ自体がとんでもないパッションに支えられてるわけです。そこがおもしろい。「山に登りたい」という動機それ自体は万人に共有されるものではありません。酔狂であり，全然ロジカルでも何でもない。だけれども，山をひとつの目標と定め，非常にデモクラティックな雰囲気のなかで，そこにいるそれぞれの人が自分自身の知的世界を自分なりに作り始めているんです。そういう発展途上人が集まって，あくまでその論理的な世界で，合理的に物事を判断し決めて実行していく。その一番基盤の部分に，簡単な言葉でいえば「もう，ただ山が好き」としか言いようがない，共有するメンタリティがあるのだけど，あくまでデモクラティックにロジカルにすべてのことを進める。僕はまあ，うん，丸々五年間かな，山岳部時代をすごしたわけですけれど。けっきょく一年留年してヒマラヤまで行きましたからね。振り返ってみると，その五年間で，自分がもうそれ以外にはあり得ない者になってしまったと思います。なぜなら，十八から二十二，三までの人生の大切な時期をそういう世界ですごしちゃったわけですからね。だからたまたま熱意のおもむくところが，今はチンパンジーの研究になっているだけで，そこでやっている「研究」のやり方は，山岳部ですごした時のやり方そっくりそのまんまのことをやってるなあと思います。

❶はい，どうもありがとうございました。随分長くなりました。ほんとにどうも，お時間取らせて…。

（このインタビューは1998年10月15日におこなわれた）

科学を考える

人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点

1999年1月20日　初版第1刷印刷
1999年2月1日　初版第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

編著者　岡田　猛
田村　均
戸田山和久
三輪　和久
発行者　丸山　一夫
発行所　㈱北大路書房
〒603-8303　京都市北区紫野十二坊町12-8
電話　(075) 431-0361㈹
FAX　(075) 431-9393
振替　01050-4-2083

© 1999　印刷／製本　㈱太洋社
検印省略　落丁・乱丁本はお取り替えいたします

ISBN4-7628-2129-2 Printed in Japan